

工業高等専門学校における英語ディベート活動の抵抗感を軽減する指導方法と教材に関する実践的研究

朝美, 淑子

<https://hdl.handle.net/2324/6787693>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (学術), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏名	朝美 淑子				
論文名	工業高等専門学校における英語ディベート活動の抵抗感を軽減する指導方法と教材に関する実践的研究				
論文調査委員	主査	九州大学	教授	井上 奈良彦	
	副査	九州大学	准教授	内田 諭	
	副査	九州大学	教授	稲葉 美由紀	
	副査	大分大学	准教授	麻生 雄治	
	副査	大分大学	准教授	大下 晴美	

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、ディベート活動に対する抵抗感を軽減するために有効な教材・指導法はどのようなものか、という問いに対し、著者自身が教員として学生や同僚教員とともに教材を開発し、その効果について実践的な授業を通して検証することにあった。英語教育におけるディベート活動の導入は、学習指導要領とそれに基づく検定教科書や授業実践において重要視される活動の一つであるが、実際の導入には様々な障壁があり、十分に成果を上げているとは言い難い。その中で、ディベートに特有の反論や反駁という活動は、学習者の心理的抵抗感が強く、教員が苦心するところである。これまでの国内外の研究において、心理的抵抗の指摘は多く、それを克服しようという授業実践もいくつか報告されているが、限定的である。その中で本論文は、2年間の詳細な実践記録に基づく授業の変化とその考察を報告し、日本の工業高等専門学校において教員と学生（高校2年生に相当）がどのように心理的抵抗感を乗り越えてクラス内英語ディベート大会を実施したのかを明らかにするアクションリサーチとなっている。

本論文は以下の7章からなる。第1章序論において研究の目的と背景や研究課題を説明した後、第2章では、ディベートの教育的効果とエンゲストロームの拡張的学習の先行研究について概観した。その結果、教員として授業実践の変革を引き起こし、研究者として何が起こっていたのかを解釈するモデルとして、エンゲストロームの拡張的学習の発達のワーク・リサーチの方法論的なサイクルを用いることの妥当性を示している。また、ディベートの心理的抵抗を軽減する授業方法の研究不足を明らかにしている。

第3章では、研究の方法として、英語ディベートとその導入活動を考案する枠組みを示し、新たな道具としての教材開発のために、これまでの英語ディベートにおける筆者の活動の観察・記述とその分析を行った。その結果、英語ディベート活動の抵抗感には、英語使用に関する抵抗感だけでなく、自分の考えとは異なる意見を述べることや反駁を行うことに対する個人的な抵抗感と、反駁を是認する態度が育成されていないために生じる集団的抵抗感が存在することが明らかになった。そこで1年目の新たな道具として、ゲームを通して多様な視点を共有しながら災害時の問題を疑似体験する「クロスロード」(商願番号2004-83439(第28類))を採用することにした。その後、活動中の変化を観察・記述するために、ビデオ録画した授業中の発話を文字化し、活動後の変化の観察・分析のためにアンケート調査を行うことを示した。さらに、実践授業の場である工業高等専門学校の概要について説明している。

第4章では、1年目の実践の詳細およびその結果と考察を述べている。「クロスロード」はそのゲーム性の高さにより、自分の意見や自分の考えとは異なる意見を述べることに對する個人的および集団的な抵抗感を低減するために有効な教材であるということが明らかになった。一方、基本的には日本語で行うゲームであるため、英語でゲームを行おうとしたり、英語ディベートの実践を行った際に、日本語ではできたことが英語ではできなくなるということで、英語に対する抵抗感が加重されるという課題も明らかになった。

第5章では、「クロスロード」を改良した2年目の新たな事前指導用教材「DTBD (Dare To Be Different)」を用いた実践授業とその結果及び考察を報告している。活動中の発言の記録、および活動後の自由記述のアンケート結果を基に、DTBDの効果について検証した。1年目の課題を解消しながら作成したDTBDの使用によって、意見を述べる際の心理的抵抗感が個人的にも集団的にも軽減すること、特別な教示がなくても反駁が促進されること、英語に対する抵抗感が「クロスロード」よりはやや軽減される傾向にあることが明らかになった。一方、DTBDの問題作成に関しては、学習者の英語力や問題に対する背景知識などを考慮する必要があることが示唆された。

第6章では、DTBD使用実験群と使用しない統制群が行ったディベート大会の発言における反駁に関する記録と事前事後のアンケート結果を検証した。その結果、実験群は反駁の回数が統制群よりもやや多く、反駁のパターンもやや多様化している傾向があった。そのため、DTBDを用いた事前指導で得られた情意的側面での効果やスキルの一部を英語ディベートに応用している可能性が示唆された。一方で、アンケート結果からは、90分授業1回だけDTBDを用いた事前指導では英語ディベート活動の抵抗感の軽減に繋がっていないことが明らかになった。

第7章では、それまでの内容を総括し、本論文から得られる教育的示唆および今後の課題について述べている。1回の授業における事前指導では十分な効果が確認できなかったこと、新たに作成した教材DTBDの問題文などのさらなる改善が必要なこと、などがある。

本論文の成果は、教室におけるディベート活動への事前指導として、ディベートとは異なる「クロスロード」やDTBDのような教材を用いることによって、反論や反駁、自分の真意とは異なる意見の表明などについて、学習者個人や集団としてクラスの抵抗感がある程度軽減され、学生がより積極的に多様な意見の表明を行うことが明らかになったことにある。

一方、本論文における質的な記述不足や量的な研究方法の問題点もいくつか指摘することができるが、それは今後の研究において改善を求めるものである。

以上の点から本論文は、コミュニケーション学、英語教育学への学問的貢献のみならず、今後の英語ディベート授業の導入に貴重な示唆を与えるものであり、本調査委員会は、本論文を博士(学術)の学位に値すると判断した。